サザエさん sazae-san を さがして

ミネラルウオーター

インテリとネオン街の水

食欲の面では、そろいもそろって全員、食い意地が張っていると陰口をたたかれるサザエ一家。その食卓には豪勢なおかずが引きも切らず、などということはありえない。

時たまの一点豪華メニューが涙ぐましい味覚のカタルシスをもたらすかのような基本粗食である。

だが、このおとぼけ食いしん坊キャラは目ぐらましの仮の姿。じつはそろいもそろって全員、舌の肥えた食通で、日々、食卓ではねちねちとウンチクが垂れ流され、飼い猫のタマでさえカツオ節ご飯はまたいで去るという、マンガに描かれない一家の裏の日常があるやも知れない。

そんな疑念が、「サザエさん」を通読しているとフラッシュバックすることがある。今回の掲載作でその突っこみどころは、まずひとコマ目のミネラルウオーターだった。

ふだんの飲み水といえば、まだ水道水が当たり前だった70年代前半に、庶民の家庭ではほとんどミネラルウオーターなど見かけられなかったはずである。

磯野家に備蓄されようとしているミネラルウオーターのブランドも苦もなく突き止められた。ガラス瓶の形とサイズはどう見ても、戦前から発売されている「富士ミネラルウォーター」なのである。

富士ミネラルウォーターは29（昭和4）年、日本で最初に商品化された無発泡のミネラルウオーターだ。製造元の富士ミネラルウォーター株式会社は山梨県の私鉄、富士急行の子会社。武田信玄の隠し湯と言い伝えられる同県身延町の下部温泉のわき水を「日本アビアン」の名で売り出したのが起源で、初代満鉄総裁や大正時代の東京市長を歴任した政治家の後藤新平が「これはフランスのエビアンよりうまいじゃないか」と感嘆したのが命名の由来だという。

「炭酸で割るハイボールかオン・ザ・ロック一辺倒だったウイスキーの飲まれ方が、60年代後半に水割り主流に変わってから、うちの瓶詰はネオン街ではあまねく抜群の知名度を誇っていました。だから、どのご家庭でもだんなさんはご存じだったはずです」

掲載作が描かれたのと同時代に入社したという富士ミネラルウォーター常務の伊東延和さん(66)はそう語る。

戦前、まだ鉱泉水と呼ばれていたミネラルウオーターを「食卓水」として世に広めようとした同社は、毎月一升瓶10本を届ける「水を飲む会」という宅配サービスまで考え出したが、60年代まで、得意客は上流のインテリ層に限られていたようだ。

写真は61年の朝日新聞から再録したものだが、記事では、米国の民間療法にならって、リンゴ酢をたらした富士ミネラルウォーターを「整腸法」として飲む美容研究家を紹介している。伊東さんも、庶民の主婦層に食いこむべく米穀店で扱ってもらったものの、思惑がはずれて悔やんだ体験があるそうだ。ミネラルウオーターがふだんの飲み水になるには90年代まで待たねばならなかった。

「ほう、カニ缶がある。非常食は缶切り不要のコンビーフが当たり前だったのに、さすがはサザエさんですな」

2コマ目に隠れていたもうひとつの突っこみどころ。伊東さんにも目ざとく見抜かれてしまった。（保科龍朗）

ある美容研究家は朝食前の「ぜいたくな」整腸法としてミネラルウオーター（卓上の手前の瓶）を飲んでいた＝61年12月、都内

単行本が第3弾『またまたサザエさんをさがして』まで発売中です。朝日新聞出版刊、1000～1260円。ASA経由でも購入できます。

この日こんな記事も

空の南米移住第一弾　南米への移住者45人が羽田空港から日航機で飛び立った。船旅が打ち切られたための最初の空の移住者。渡航に要する時間は1カ月半から1日半へ短縮された。